

# 生徒の社会意識の分析とその指導

織田長繁・石黒鈺二・中尾正三

## I. 研究目的

社会科においては研究課題として上掲のテーマをとりあげた。それは次のような理由からである。われわれが社会科教育において望ましい方向に生徒を育てあげたいと努力する場合、すでに彼らはそれまでに家庭、友人、マス・コミュニケーションなどの影響によって形成された社会意識をもっているという事実常に直面する。社会科教育が単なる知識を与えるということに終るべきでないとするならば、われわれは彼らが現にもっている社会意識の実態を把握し、それがわれわれの願う方向と異なるひずみや偏向をもっているとするなら、その原因を可能な限り探究し、その結果にもとづいて教育の方向を考えていかねばならない。そうでない限り、われわれがいかに善良なる意図をもって、いかほど努力したとしても、われわれの声は生徒の意識の表皮をなでて通りすぎるだけで、その深部にまで達することはなく、彼らの意識そのものを変革することは不可能であろう。このような理由から、われわれはこの研究をとりあげたのである。

## II. 研究方法

Iにのべた立場にもとづいて、われわれは昭和30年度以降、マス・コミュニケーションが社会意識に及ぼす影響について、次のような研究を続けてきた。①映画「しいのみ学園」に対する反応、②「原子力平和利用博覧会」見学の社会的態度に及ぼす影響、(以上30年度)、③「日ソ交渉」をめぐる新聞の影響、④映画「最後の橋」の鑑賞指導による社会的態度の変化、⑤映画「真昼の暗黒」の鑑賞指導による社会的態度の変化(以上31年度)

以上の研究にひきつづき、今年度からわれわれは社会意識そのものを対象として研究することにした。生徒の社会意識の研究といっても広範な領域であるが、今年度はとくに高校におけ

る受験勉強がどのような影響を与えているかという問題について焦点をしばってゆくことにした。そのための研究の方法として

イ. 文献の研究

ロ. 受験雑誌の内容分析とその生徒に対する影響の調査

ハ. 社会科教育の内容と、生徒のもっている社会意識の関連性の分析と検討

を行うことにした。来年度からはこの結果にもとづいて、具体的な指導方法研究をすすめることにしたいと考えている。

## III. 研究経過の概要

研究を進めるため、われわれは教育学部の大久保教授、上田、木原、成田助教授と、本校の社会科教官、および他教科の有志教官からなる共同研究会をしばしばもって、学問的なまた他教科の立場(すなわち広く教科をとえた教育全般の立場)から、いろいろと検討してもらい指導助言を得て、ほぼ次のような結論を得た。

最初は受験勉強の影響をさぐってゆく手がかりとして、最も広く読まれかつ大きな影響を与えていると思われる雑誌「螢雪時代」をとりあげ、その影響をしらべたいと考えた。これは前年度までのマス・コミ研究の方向の延長としても考えられたのである。しかし読書調査の結果案外その定期講読者が少なかったこと、また研究会の討論中に次のような意見が出たことによって、この方法を修正することにした。すなわち、とにかく受験期の高校生がたまたま「螢雪時代」などによく現われる受験勉強を矛盾なく肯定するような考え方をしているとしても、それは雑誌の直接的な影響とは考えられない。むしろその雑誌にあらわれる考え方も、受験生の中に多くみられる考え方も、おそらく同じ一つの根から生みだされたものとして考えるべきではないか。だから現在の社会の中での社会意識のありかた、その形成のされ方、それこそが

問題とされるべきではないか、というのである。

以上のような経過をへて、次のような調査を高校2年および高校3年の男女生徒167名に対しておこなった。

A. 簡単な形式論理、およびより複雑な推理を要する論理、の思考力に関するテスト。

B. 時事問題に関する知識と、それに対する態度に関する調査。

C. 人間の生き方に関する12の考え方(二つずつ対になった6組の意見)についての態度の調査。

問題を作製するのにわれわれはAは後藤、岡本式高校用団体知能検査の中から適当なものをえらび、それにわれわれが作製したものを加えた。Bは当時問題となりジャーナリズムをにぎあわせていた六つの問題を取りあげ、それに関する知識と、それに対してどのような態度をもっているかをしらべられるような問いを話しあいによって作製した。Cは「螢雪時代」やその他の受験生を対象とする出版物の中から、代表的なと思われる考え方を六つえらび、それと対応すると考えられる逆の考え方を、社会科教科書やわれわれの話しあいによって作製した。

以上の調査によって、彼らの社会意識のあり方、および知的理解や論理的思考力、社会科教育の成果などの相互関係などについて、その実態を明らかにしたいと考えたのである。

#### IV. 研究の結果

##### 1. 論理的な思考能力について

これは例えば、

例 すべての動物は生きている。すべての犬は動物である。故に

1. 犬以外の動物は生きている。
2. すべての動物は犬である。
3. すべての犬は生きている。

のような簡単な形式論理についてまず調べたのであるが、その結果をみると、このような形式的な論理思考においては学年別、男女別の差はないように思われた。

つぎに複雑な推理を要する論理的思考力(例は省略)は、いくつかの資料をもとにして、

A: この資料から判断して正しい。

B: この資料から多分正しいだろう。(ただし断定は出来ない。)

C: この資料からではわからない。

D: この資料から多分誤りだろう。(ただし断定は出来ない)

E: この資料から判断して誤りである。

及B、Dの場合には、外にどんな資料が必要か文末に記しなさい。

のような判断を下させる問題で調べてみたのであるが、その結果は男女別の差はないが、学年差においては高校3年の方がやすすぐれているように思われた。しかしこの高校2年と3年は入学者選抜方法が異なるので、厳密に学年差とみることができかどうか断言することはできない。

ともかく以上のような判断能力をもとにして時事問題や人生観に対する彼らの反応の結果を分析すると、ほぼ次のような結果を得た。

##### 2. 時事問題に関する知識および態度について

ここでわれわれは、①「三悪追放」と政治、②「きれいな水爆」と水爆の利用、③米価問題④「シラード裁判」と「行政協定」⑤「国鉄スト」と労働問題、⑥「原子力の平和利用」の六つの問題を取りあげ、それに関する知識と態度を調べた。

1 A. 岸首相は度々「三悪追放」ということをいっているが、それはどういうことか。

- イ. 汚職、暴力、貧乏の追放
- ロ. 独善、暴力、秘密の追放
- ハ. 地盤、看板、かばん(金)の追放
- ニ. 酒色、権力、金力の追放

1 B. 日本の政治にはとかく悪いことがつきまとうといわれますが、それについてどう思いますか。

- イ. 政治である以上多少の害悪がつきまとうのは当然である。
- ロ. 政治はガラス張の箱の中で行われるようにきれいなものであるべきだ。
- ハ. 政治はきれいなものであってほしいが、多少の害悪が入りこんでくるのは止むを得ない。
- ニ. 政治に害悪が入り込んでくるのは、政治組織そのものに問題があるのだから、まず、それを直さなければならぬ。

生徒の社会意識の分析とその指導

表 1

		高 2	高 3	高2・3 男	高2・3 女	計
1 A	イ	89.8	93.0	93.0	88.5	91.4
	ロ	4.5	3.5	1.8	8.9	4.0
	ハ	2.3	1.1	0.9	3.3	1.7
	ニ	1.1	2.3	2.7		1.7
	なし	2.3		1.8		1.2
1 B	イ	3.4	3.5	5.3		3.5
	ロ	22.7	32.5	29.2	24.6	27.7
	ハ	15.9	12.8	11.5	19.7	14.4
	ニ	52.4	46.5	47.8	52.5	49.7
	その他	4.5	3.5	4.4	3.3	4.0
	なし	1.1	1.2	1.8		1.0

1 A については正解の(イ)が多い。知識はこうであるが、態度 1 B については必要悪(イ)と考えるものが少なく、理想論、改革論と考えるもの(ロ)(ニ)合わせると70~80%となり、政治に対して絶望的に肯定するものよりもはるかに多く、高校生らしい批判力と理想主義的態度がみえる(表 1)。

2A. 最近「きれいな水爆」ができると言明した国があります。

(1) 「きれいな水爆」とはどんな水爆ですか。

- イ. 原子灰をほとんど伴わない水爆
- ロ. セシウム 137 のない水爆
- ハ. ほとんど放射能の害を与えない水爆

(2) それを言明したのはどこの国ですか。

- イ. 米国 ロ. ソ連 ハ. イギリス

2B. 「きれいな水爆」なら使ってもよいという人と、それでも使つてはならないとする人があります。あなたはどう思いますか。

- イ. 使ってもよい
- ロ. 使ってはよくない
- ハ. わからない
- ニ. その他

2A(1)は正解(イ)が約半数内外である。(高3が少ないのは説明がつかない) 2A(2)は正解(イ)が半数を超えている。(ハ)のイギリスが20%を超えているが、これは当時クリスマス島実験で対英感情が鋭くなっていたことの反映であると思われる。2Bについては「使ってはよくない」が80%内外で、ただ女子がやや低く、その代り「分らない」が多いのは注意してもよいことと思われる(表 2)。

表 2

		高 2	高 3	高2・3 男	高2・3 女	計
2 A (1)	イ	31.8	50.0	46.9	29.5	41.0
	ロ	4.5	5.8	7.1	1.6	5.2
	ハ	60.5	39.6	43.3	65.6	51.4
	二つ		1.2	0.9		0.6
	なし		3.5	1.8	3.3	2.3
2 A (2)	イ	56.9	60.1	60.1	55.8	58.6
	ロ	10.2	7.0	6.2	13.1	8.6
	ハ	23.9	22.1	23.0	23.0	23.0
	二つ	4.5	4.7	6.2	1.6	4.6
	なし	4.5	5.8	4.4	6.6	5.2
2 B	イ	10.2	4.7	6.2	9.8	7.5
	ロ	76.2	82.5	85.0	68.9	79.4
	ハ	10.2	7.0	4.4	16.4	8.6
	ニ		3.5	1.8	1.6	1.7
	なし	3.4	2.3	2.7	3.3	2.9

3A. 最近閣議で本年度産米米価が決定されました。それはどのように決められましたか。

- イ. 生産者米価も消費者米価も昨年通り据置きとなった。
- ロ. 生産者米価も消費者米価も昨年より少し値上げされた。
- ハ. 生産者米価は値上げされたが、消費者米価の決定は後日に持越された。

3B. ある人が、「都市の生活水準は農村より高い。農民に今の米価水準で我慢してもらっている以上都市生活者も配給米の少しくらいの値上げは我慢すべきではないか」といっています。

これについて、あなたはどう思いますか。

- イ. そうだと思う。ロ. そうは思わない。ハ. わからない。ニ. その他 ( )

3 A の米価問題については正解(イ)が意外に少なく、それについての態度 3Bも(イ)(ロ)(ハ)と分散しているのは、考えさせられるが、後述の5A, 5Bの国鉄スト問題の結果と組み合わせると、「彼らの社会意識が低い」という結論を下すよりも、むしろ都会生活をしている彼らの現実生活とこの問題とが結びついていないからであろう、と考えた方がいいのではないと思われる。特に 3Bにおいて「値上げを我慢すべき」とは思わない(ロ)という考えが比較的多いのは、都市生活者の意識が反映しているように思われる(表 3)。

表 3

		高 2	高 3	高2・3 男	高2・3 女	計
3 A	イ	12.5	15.1	13.3	14.8	13.8
	ロ	51.2	38.4	46.9	41.0	44.8
	ハ	31.8	31.4	31.0	32.8	31.6
	なし	4.5	15.1	18.9	11.5	9.8
3 B	イ	30.7	17.4	25.6	21.3	24.1
	ロ	39.8	54.7	45.1	50.8	47.1
	ハ	20.4	20.9	19.5	23.0	20.7
	ニ	1.1	1.2	0.9	1.6	1.2
	なし	8.0	5.8	8.9	3.3	6.9

4A. 今度、米国の最高裁判所でジラード裁判について最後の判決を下しました。

(1) それはどんな判決でしたか。

- イ. ジラードは米国の法律の下に裁かれるべきである
- ロ. ジラードは日本の法廷で審理すべきである
- ハ. ジラードは日米合同刑事特別分科会で、その処置を審議決定すべきである
- ニ. ジラードは米国軍の軍事裁判にかけられるべきである

(2) このような事件をひきおこした米国軍の駐留はどのようなとりきめにもとづいているか。そのとりきめの名を書きなさい。( )

4B. このような裁判事件が起ったことについてあなたはどのように思いますか。

- イ. 駐留軍に対する裁判権はすべて日本がもつべきだ
- ロ. 今のように双方の相談できめればよい
- ハ. 米軍は撤退すべきだ
- ニ. 駐留軍の軍人については米軍の軍事裁判に委ねるべきである
- ホ. その他

4A (1) については正解(ロ)が80%以上を占めるが、女子がやや少ないのは2Bと同じく注意していることと思われる。(2)について案外知っている者が少なく、とくに女子においてはそれが著しいことも注意される。態度4Bについては裁判権を主張するもの(イ)、撤退すべしと主張するもの(ハ)が、それぞれ高2高3に多いのは注意すべき現象と思われる。米軍に委すべきだとする主張(ニ)が皆無であることも注意してよい(表4)。

表 4

		高 2	高 3	高2・3 男	高2・3 女	計
4 A	イ	2.3	1.2	0.9	3.3	1.7
	(1) ⊙	81.8	90.6	93.0	73.8	86.2
	ハ	6.8	2.3	2.7	8.2	4.6
	ニ	1.1	1.2		3.3	1.2
	なし	8.0	4.7	3.5	11.5	6.3
4 A	安全	23.9	44.2	41.6	19.7	28.1
	(2) 行政	19.3	9.3	20.3	3.3	14.4
	その他	6.8	8.1	6.2	9.8	7.5
	なし	50.0	38.4	31.8	67.2	44.2
4 B	イ	47.7	25.6	36.3	37.8	36.8
	ロ	19.3	19.8	15.0	27.9	19.5
	ハ	21.6	43.0	34.5	27.9	32.2
	ニ					
	ホ	1.1	4.7	4.4		2.9
	二つ	8.0	5.8	8.0	4.9	6.9
	なし	2.3	1.2	1.8	1.6	1.7

5A. 現在行われている国鉄ストは何を問題として闘争しているか

- イ. 待遇改善のため
- ロ. 運賃値上げ反対のため
- ハ. 国鉄職員不当処分反対のため
- ニ. 公労法改訂反対のため

5B. このような国鉄ストについてあなたはどのように思いますか。

- イ. 一般の人々に迷惑になるばかりだから反対である
- ロ. 労働者の立場を考えて、多少の不便は我慢すべきであろう
- ハ. 労働者の立場には同情するが、一般の人々に迷惑をかけるストの方法を考えるべきである
- ニ. その他

国鉄ストの問題は前述の3と比較してはるかに正解5A(ハ)が多いのは、都市生活と結びついたものとしてうなづけるが、ここで学年差、男女差がみられるのは注意してよい。しかしそれに対する態度において、理解と同情を示しつつその健全な発展を願う態度(ハ)が、ともに多いのは、彼らの良識を示すものと考えてよいであろう(表5)。

生徒の社会意識の分析とその指導

表 5

		高2	高3	高2・3 男	高2・3 女	計
5 A	イ	15.9	7.0	5.3	23.0	11.5
	ロ	9.1	1.2	3.5	8.2	5.2
	⊙	67.0	81.3	81.4	60.7	74.1
	ニ	1.1	2.3	0.9	3.3	1.7
	二つ	1.1	3.5	1.8	3.3	2.3
	なし	5.7	4.7	7.1	1.6	5.2
5 B	イ	12.5	15.1	16.8	8.2	13.8
	ロ	6.8	8.1	8.0	6.6	7.5
	ハ	77.5	71.0	71.6	78.7	74.1
	ニ	1.1	2.3	1.8	1.6	1.7
	二つ	1.1	2.3	0.9	3.3	1.7
	なし	1.1	1.2	0.9	1.6	1.2

6A. 原子力の平和利用は、米、ソ、英のうちどれが最も進んでいると思いますか。

イ. 米 ロ. ソ連 ハ. 英 ニ. わからない  
ホ. その他 ( )

6B. 現在各地で原水爆実験禁止運動が盛んに行われています。あなたはそれをどう思いますか。

	イ. 賛成	ロ. 反対	ハ. どちらでもない
理由 (具体的に)	イ. すぐに参加したい ロ. 機会があれば参加したい ハ. 頼まれたら協力する(署名など) ニ. 参加も協力もしない	イ. すぐやめさせたい ロ. 機会がある毎に反対する ハ. そのことにかかわりたくない ニ. たのまれたらしぶしぶ協力する	イ. かかわりを持ちたくない ロ. 考えてもわからない ハ. 考えたこともない

表6の1

		高2	高3	高2・3 男	高2・3 女	計
6 A	イ	42.1	17.4	28.3	32.8	29.9
	ロ	29.5	22.1	23.0	31.2	25.9
	ハ	9.1	12.8	15.9	1.6	10.9
	ニ	18.2	39.5	29.2	27.9	28.7
	ホ	1.1	3.5	1.8	3.3	2.3
	なし		4.7	1.8	3.3	2.3
6 B	賛成	78.5	83.7	81.4	80.3	81.0
	反対	12.5	2.3	8.9	4.9	7.5
	否定	4.5	10.5	4.4	13.1	7.5
	なし	4.5	3.5	5.3	1.6	4.0

表6の2

		高2	高3	高2・3 男	高2・3 女	計
賛成	イ	21.6	11.6	17.7	14.8	16.7
	ロ	20.4	31.4	23.9	29.5	25.9
	ハ	22.7	27.9	24.8	26.2	25.3
	ニ	5.7	8.1	8.9	3.3	6.9
反対	なし	8.0	4.7	6.2	6.6	6.3
	その他					
反対	イ	6.8	1.2	4.4	3.3	4.0
	ロ	1.1		0.9		0.6
	ハ	2.3		1.8		1.2
	ニ	2.3	1.2	1.8	1.6	1.7
否定	なし					
	その他					
否定	イ	1.1	1.2	0.9	1.6	1.2
	ロ	2.3	4.7	0.9	8.2	3.5
	ハ	1.1	2.3	1.8	1.6	1.7
	ニ	4.5	5.8	6.2	3.2	1.2

6Aについては高2と高3が前者はアメリカが進んでいる(イ)が多く、後者はわからない(ニ)と判断に慎重を期すものが多いのは注意してよい現象と思われる(表6の1)。態度については原水爆実験禁止運動賛成が80%内外を示している(表6の1)が、更にこまかくそのうちわけをみると(表6の2)の通りである。ただ賛成のうち「参加も協力もしない」(ニ)というのが少数ながら存在することも注意してよい。

以上各問題ごとに検討してきたが、更に4A(2)と4B, 5Aと5Bをとりあげて、知識と態度とがどのように連関しているかを検討してみると次のような結果がみられる。(表7, 表8)

表7 4A(2): 4B

4A(2)	高2		高3		高2・3男		高2・3女	
	安全行政	その他	安全行政	その他	安全行政	その他	安全行政	その他
イ	16	26	12	10	21	20	6	17
ロ	6	11	9	8	12	6	2	15
ハ	13	6	19	18	30	9	6	11
ニ								
ホ		1	4		4	1		
二つ	2	5	2	3	3	6		6
なし	1	1		1	1	1		2

共 同 研 究

注. 4A(2) このような事件をひきおこした米軍の駐留はどのようなとりきめにもとづいているか。

そのとりきめの名を書きなさい。

4B このような裁判事件が起ったことについてあなたはどのように思いますか。

イ. 駐留軍に対する裁判権はすべて日本がもつべ

きだ

ロ. 今のように双方の相談できめればよい

ハ. 米軍は撤退すべきだ

ニ. 駐留軍の軍人については米軍の軍事裁判に委ねるべきである

ホ. その他

表8 5A:5B

5A 5B	高 2						高 3						高 2・3 男						高 2・3 女					
	イ	ロ	ハ	ニ	ニつ	なし	イ	ロ	ハ	ニ	ニつ	なし	イ	ロ	ハ	ニ	ニつ	なし	イ	ロ	ハ	ニ	ニつ	なし
イ	1	2	8				1		12				1	2	15				1		4			
ロ	2	1	3					1	4		2		1	1	7				2	1	1			
ハ	11	5	47		1	4	5		53	2		1	4	1	68	1	2	5	11	4	30	2		1
ニ												2			1			1			1			
ニつ			0	1					1		1				1						1		1	
なし			0			1						1						1						1

注 5A. 現在行われている国鉄ストは何を問題として闘争しているか

イ. 待遇改善のため

ロ. 運賃値上げ反対のため

ハ. 国鉄職員不当処分反対のため

ニ. 公労法改訂反対のため

5 B. このような国鉄ストについてあなたはどのように思いますか。

イ. 一般の人々に迷惑になるばかりだから反対である

ロ. 労働者の立場を考えて、多少の不便は我慢すべきであろう

ハ. 労働者の立場には同情するが、一般の人々に迷惑をかけないストの方法を考えるべきである

ニ. その他

「シラード事件」に関する態度と知識の関係をみると、それが「安全保障条約、行政協定」から派生してきたことを知っているものと知らないものとの間に、その態度の相違はいちじるしくみうけられない(表7)。「国鉄スト」については、それを知って、ハ)の態度をとるものがいちじるしく多い(表8)。ここからいえる

ことは、あることがらについては、そのことについてははっきりした知識をもっていなくても、すでにその前にある態度が形成されている、ということであろう。

さらに判断の慎重さと知能との関係を調べるために(6A)と知能偏差値の関係をみてみたが、次の表9(1)(2)ような結果を得た。

表9(1) 6A:知能偏差値(高校用団体知能検査)

知能 6A	高 2								知能 6A	高 3							
	~75	74~70	69~65	64~60	59~55	54~50	45~	なし		~75	74~70	69~65	64~60	59~55	54~50	49~	なし
イ	2	10	11	7	4	3		2	イ		6	6	2			1	
ロ	1	6	5	3	6			2	ロ		4	5	2	5	1	2	
ハ	1	2	2		1	1		1	ハ		5	2	3	1			
ニ	5	1	3	2	2	2		1	ニ		10	11	6	4		1	2
ホ					1				ホ		1				1		
なし				1					なし		1	1		3			

表9(2)

知能 6A	高 2・3 男								知能 6A	高 2・3 女							
	~75	74~70	69~65	64~60	59~55	54~50	45~	なし		~75	74~70	69~65	64~60	59~55	54~50	49~	なし
イ	2	12	6	7	3		1	1	イ		4	11	2	1	3		
ロ		9	5	2	6			2	ロ	1	1	5	3	5	1	2	
ハ	1	7	4	3	2			1	ハ						1		
ニ	5	11	8	5	3	1		1	ニ		6	3	3	1	1		2
ホ		1			1				ホ						1		
なし		1		1	1				なし		1			2			

注 6A 原子力の平和利用は、米・ソ・英のうちどれが最も進んでいると思いますか。

イ. 米 ロ. ソ連 ハ. 英 ニ. わからない ホ. その他

この結果からは、知能の高いものは判断において慎重らしい、又男女差もあるかも知れないが、これだけでは断定的なことはいえないように思われる。

### 3. 人間の生き方に関する態度について

以上A・Bの推理判断力及び時事問題に関する知識態度についての結果の上に、更に人間の生き方に関する態度について検討していこう。

12の文章について、その考え方を、⑤非常にそう思う、④そう思う、③ふつう(分らない)②そう思わない、①絶対にそう思わない、という5段階の判断を加えさせたのであるが、そのひとつひとつについてまず検討してゆく。

(1) 人生は闘争であり、闘争こそは進歩の母である。

表10

	高2	高3	高2・3 男	高2・3 女	計
1	4.5	5.8	7.1	1.6	5.2
2	25.0	22.1	25.6	19.7	23.5
3	22.7	25.6	20.3	31.2	24.1
4	29.5	31.4	30.1		30.4
5	18.2	15.1	16.8	16.4	11.7

闘争を肯定する考え方が学年差、男女差なく多くみうけられるのは、注意してよいことである(表10)。

(2) 天才でない者がこの世で認められるためには、はたから狂人ではないかと思われるほどの努力が必要である。

表11

	高2	高3	高2・3 男	高2・3 女	計
1	9.1	17.4	16.8	6.6	13.2
2	30.6	36.0	31.0	37.8	32.3
3	14.8	12.8	11.5	18.0	13.8
4	27.3	20.9	23.9	24.6	24.1
5	18.2	12.8	16.8	13.1	15.5

努力を肯定する考え方が高2に多くみうけられ、高3に懐疑的なものが多くみうけられるのは、学年差というより、むしろ学年の集団構成の差(比較的高3の方が高2よりも所謂学力優秀者がそろっている。これは入試選抜方法の差異による。と考えられる。男女差はほとんどみうけられない(表11)。

(3) 仕事こそ人生のすべてである。人生のよこびも楽しみもその中にこそ見出されるべきで、そのほかにあるのではない。

表12

	高2	高3	高2・3 男	高2・3 女	計
1	9.1	8.1	9.7	6.6	8.6
2	52.0	37.2	26.6	39.4	31.0
3	12.5	18.6	15.0	16.4	15.5
4	28.4	17.4	25.6	18.0	23.0
5	25.0	18.6	23.0	19.7	27.6

仕事こそ人生のすべてであるという考え方はそれを肯定するものが高2にやや多く、男子にやや多い(表12)。

(4) 何といたっても、受験勉強は必要である。そのために生徒会活動などに支障がおり、高校が

予備校化されるという声もあるが、現代に生きてゆくためには、受験勉強はしてゆかなければならない。

表13

	高2	高3	高2・3 男	高2・3 女	計
1	13.6	10.5	13.3	9.8	12.1
2	21.6	15.1	16.8	21.3	18.4
3	28.2	27.9	20.4	27.9	23.0
4	36.4	32.6	37.2	29.5	34.5
5	10.2	14.9	12.4	11.5	12.1

受験勉強を全面的に肯定する者は男女差、学年差なくやや多い。ここに現代の高校生の考え方がうかがわれるように思われる(表13)。

(5) 人生のある時代に他のことには目もくれず、ただひたむきにある事にうちこむという時期をもつことは、非常によい事だと思う。だから受験勉強に専念して、他の何もかも捨ててかえりみぬということも意味があるのだ。

表14

	高2	高3	高2・3 男	高2・3 女	計
1	20.4	11.6	15.0	18.0	16.1
2	26.1	23.2	27.4	19.7	24.7
3	22.7	16.3	21.2	16.4	19.5
4	26.1	26.8	23.9	27.9	25.2
5	9.5	22.1	30.1	14.8	24.7

ここで“馬車馬”的な生き方を肯定する者が高3に多くみられ、また男子に多いのがみられる(表14)が、これを次の考え方に対する態度とみあわせてみると、

(6) 人生は受験勉強と同じかも知れない。たとえ他の本や映画などで心を慰さめたいと思ってもやはり単語をおぼえ、式の計算の練習をしなければならぬ。人生を生きてゆくのも、そのようなものかもしれない。

表15

	高2	高3	高2・3 男	高2・3 女	計
1	12.5	10.5	11.5	11.5	11.5
2	27.3	32.5	28.3	32.8	29.9
3	28.4	26.8	28.3	26.2	27.6
4	26.1	22.1	23.9	24.6	24.1
5	5.7	8.1	8.0	4.9	6.9

人生全般にそういう態度をひろげることには抵抗を感じているようにみえる。(5)の考え方は、“人生のある時代に”というところにアクセントをつけてそれを肯定しているのではないかと思われる。これは(9)の快樂論的な考え方についての態度と思いあわせても、現代に生きる彼らの一つの特徴を示すものかとも思われる(表15)。

(7) 高校生活を、生徒会活動などを通じて、充実した生活をおくることが、将来の生活にもっとも大きなプラスになるのだ。たとえ一年ぐらい遅れたとしても、真に意義のある高校生活を送るならば何ら悔いることはない。

表16

	高2	高3	高2・3 男	高2・3 女	計
1	3.4	9.3	8.9	1.6	6.3
2	15.9	29.1	22.1	23.0	22.4
3	29.5	26.8	24.8	34.5	28.1
4	28.4	30.2	32.7	23.0	29.3
5	22.7	4.7	11.5	18.0	13.8

ここにみられる“高校生活理想論”は、男女差はないが、高3と高2とでは、高2に多くみられる。しかし高3でもそれを何らかのいみで否定し得ない、あるいは判断し得ない者が相当みられることもやはり注意しておかねばなるまい(表16)。

(8) 人間はお互いの愛と協同とによって、現在の文化を築きあげてきたのである。

表17

	高2	高3	高2・3 男	高2・3 女	計
1	4.5	8.1	5.2	8.2	6.3
2	10.2	31.4	24.8	13.1	20.7
3	14.8	23.2	18.6	19.7	19.0
4	47.8	24.4	32.7	42.7	31.2
5	22.7	12.8	18.6	16.4	17.8

人間に対する肯定的なこの考え方は明らかに高2に多い。このことは前述の傾向とあいあわせて、受験期を間近かにむかえるにつれて、“競争”というきびしい現実をひしひしと感じざるを得ないということに関係があるのではないかと思われる。男女差はあまりみうけられな



生徒の社会意識の分析とその指導

いようである(表17)。

(9) 人生は楽しくあるべきものだ。たとえ日々仕事  
事が単調で、つまらなくても、余暇をみつけて  
いろいろの芸術を鑑賞したり、スポーツを楽し  
んだりして、人生を楽しく愉快なものにしてい  
くべきである。

表18

	高 2	高 3	高2・3 男	高2・3 女	計
1		2.3	1.8		1.2
2	4.5	3.5	3.5	4.9	4.0
3	9.1	4.7	8.9	3.3	6.9
4	33.0	31.4	31.8	32.8	32.2
5	53.4	58.1	54.0	58.0	55.7

ここでみられる快樂論的な考え方は、学年差  
男女差なく圧倒的に肯定するものが多い(表18)  
この傾向と次の考え方に対する態度を考え合  
わせてみると、

(10) 自分の欲するままに生活をおくることが、か  
けがえのないほんとうの人生である。他人から  
何の制約もうけずに、その時その時の生活を楽  
しく生きればそれでいいのだ。

表19

	高 2	高 3	高2・3 男	高2・3 女	計
1	9.1	34.9	23.0	19.7	21.3
2	42.0	34.9	38.0	39.4	38.5
3	23.9	15.1	17.7	23.0	13.8
4	19.3	8.1	13.3	14.8	13.8
5	5.7	7.0	8.0	3.3	6.3

(10)にみられる「制約無視」の快樂追究は、否  
定的に考えるのが全般に多い。この(9)と(10)と  
の関係は、前述の(5)と(6)との関係の表裏をなすも  
のとみられ、快樂を肯定しつつ、制約を無視せ  
ず、禁欲的態度をある時期には肯定しつつ、全  
面的なものとしては肯定しない。そういう態度  
から、受験勉強を肯定しているのが多い。そう  
いうふうにいえるのではないと思われる(表  
19)。

(11) 人それぞれの生き方がある。それを自分のあ  
るだけの力を出して生きぬきさえすれば、その  
結果は問うところではない。

表20

	高 2	高 3	高2・3 男	高2・3 女	計
1	2.3		1.8		1.2
2	8.0	9.3	8.9	8.2	8.6
3	19.3	10.5	14.2	16.4	14.9
4	35.2	25.6	25.6	39.4	30.4
5	35.2	54.6	49.6	36.1	44.8

このように「分を知り、個性的な生き方を肯  
定するものが圧倒的に多い。とくに高3で全面  
の肯定が多い(表20)。これは(2)の考え方に対す  
る態度とみ合わせて面白い。

(12) それगतといどのような目的であれ、まわり  
のことを考えずただ馬車馬のようにガムシャ  
ラに進むということは、賢明な人間のなすべきこ  
とではない。だから、研究に没頭して戦争のあ  
つたことも知らなかったという学者の態度は非  
難されてよい。

表21

	高 2	高 3	高2・3 男	高2・3 女	計
1	9.1	9.3	10.6	6.6	9.2
2	12.5	11.6	9.7	16.4	9.2
3	29.5	15.1	18.6	29.5	22.4
4	29.5	39.5	35.4	32.8	34.5
5	15.9	24.4	23.0	14.8	20.1

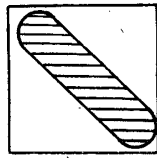
ここで「馬車馬」的生き方に対する否定の考  
え方が多いのは先の(5)(6)の考え方と合わせて当  
然のことと思われる。高3が高2より多く、男  
子がやや女子より多いが、これは(2)の傾向と相  
対するものとも思われる(表21)。

以上、各問にあらわれる考え方についてひと  
つひとつ検討してきたが、次にそれぞれ関係あ  
る(反対と考えられる)考え方についてその相  
互関係を分析してみよう。例えば、人生を闘争  
であるとする(1)について肯定の態度を示しな  
がら、人生を愛と協同であるとする(8)につい  
てやはり肯定しているものもある。こういう判  
断の矛盾がどのようにあらわれているか、それ  
ぞれ、二つずつ対応する文の組合わせの分析を  
やってゆこう。以下かかげる表は、例えば(1)  
についての判断①②③④⑤(これについては前述)  
と(8)についての判断①②③④⑤と組み合わせ、  
①と②、④と⑤を一緒にして、否定的、分らな

図 1

	否定	分らない	肯定
否定			
分らない			
肯定			

図 2



い、肯定的の三つの群に分けて整理したものの表である。数表の配列は図1に示した順による。対応する文はそれぞれ相反する考え方であるから、一方を肯定すれば、他方を否定するのが論理的であるから、この表では図2に示したところに判断がかたまるのが普通であり、そうならないことは、判断が矛盾し分裂していることを示すものと考えられる。しかしその判断の矛盾が、論理的思考力の貧しさを示すものであると早計に断定することはひかえるべきで、むしろその矛盾に現代に生きる人間の姿をみることのできるのではないかと思われる。

- (1) 人生は闘争であり、闘争こそは進歩の母である。  
 (8) 人間はお互いの愛と協同によつて、現在の文化を築きあげてきたのである。

表22 高 2 高 3

	(8)		
	6	4	14
(1)	3	10	11
	9	4	32
	男		女

	(8)		
	17	5	15
(1)	5	6	12
	16	11	26
	3	3	8
	3	8	8
	7	4	18

ここでは、共に肯定するものが高2に多く、共に否定するものが高3に多く、男女別をみると、ともに肯定するものが男女とも多い。

- (2) 天才でない者がこの世で認められるためにははたはら狂人ではないかと思われるほどの努力が必要である。  
 (11) 人それぞれの生き方がある。それを自分のあ

るだけの力を出して生きぬきさえすれば、その結果は問うところではない。

表23 高 2 高 3

	(11)		
	4	3	27
(2)	2	6	4
	3	8	31
	男		女

	(11)		
	7	5	41
(2)	1	4	8
	3	7	37
	4	2	21
	2	5	4
	1	3	19

ここでは(1)と(8)のように矛盾におちいるものがやや少なくなっているが、やはり両方ともに肯定するものが相当数おり、これは二つの文章のどこにアクセントをおいてうけとるかということとも関係があり、(2)の考え方をとりながら(11)の考え方をもとめることが可能であるともいえし、注意してよい現象であるともいえよう。

- (3) 仕事こそ人生のすべてである。人生のよるこびも楽しみもその中にこそ見出されるべきで、そのほかにはあるのではない。  
 (10) 自分の欲するままに生活をおくることが、かけがえのないほんとうの人生である。他人から何の制約もうけずに、その時その時の生活を楽しく生きればそれでいいのだ。

表24 高 2 高 3

	(10)		
	17	8	6
(3)	2	4	5
	29	12	9
	31	6	1
	8	4	3
	19	4	9
	男		女

	(10)		
	31	5	6
(3)	8	3	6
	82	12	10
	18	11	3
	2	3	1
	13	5	7

生徒の社会意識の分析とその指導

(10)の無制約快樂の考え方を否定しつつ、(3)の「仕事こそすべて」の考え方に対しては、高2と高3では、前者はそれを肯定し、後者は否定している。男女差はあまりみうけられない。

(4) 何といっても、受験勉強は必要である。そのために生徒会活動などに支障がおこり、高校が予備校化されるという声もあるが、現代に生きてゆくためには、受験勉強はしてゆかなければならない。

(7) 高校生活を、生徒会活動などを通じて、充実した生活をおくることが、将来の生活にもっとも大きなプラスになるのだ。たとえ一年ぐらい遅れたとしても、真に意義のある高校生活を送るならば何ら悔いることはない。

表25 高 2 高 3

(7)						
(4)	2	6	<u>20</u>	5	5	12
	4	7	5	4	10	11
	10	14	<u>20</u>	②4	10	5
	男			女		

(7)						
(4)	6	7	<u>19</u>	1	4	13
	4	7	12	4	10	4
	<u>24</u>	12	<u>18</u>	10	8	7

ここでは、高校生活の理想性を否定して、受験勉強を肯定する一貫した判断の傾向が、高3と女子にみうけられるようである。(7)において高校生活理想論をとるもの45のうち(4)においては20と20とそれぞれ肯定と否定が分裂するものがみうけられることとともに注目すべき現象であると思われる。

(5) 人生のある時代に、他のことには目もくれずただひたむきにある事にうちこむという時期をもつことは、非常によい事だと思う。だから受験勉強に専念して他の何ものも捨ててかえりみぬということも意味があるのだ。

(12) それがたとえどのような目的であれ、まわりのことを考えず、ただ馬車馬のようにガムシャラに進むということは、賢明な人間のなすべきことではない。だから、研究に没頭して戦争のあったことも知らなかったという学者の態度は非難されてよい。

表26 高 2 高 3

(12)						
(5)	8	9	②6	7	2	<u>21</u>
	3	11	5	1	4	10
	8	8	<u>12</u>	10	8	<u>23</u>
	男			女		

(12)						
(5)	9	8	<u>32</u>	6	3	<u>15</u>
	2	9	13	2	6	2
	13	5	<u>22</u>	5	9	<u>13</u>

全体を通じて馬車馬的生き方(12)を否定するものが多いが、(5)の条件付馬車馬の生き方については肯定するものと否定するものとに分裂している。

(6) 人生は受験勉強と同じかも知れない。たとえば他の本や映画などで、心を慰めたいと思ってもやはり単語をおぼえ、式の計算の練習をしなければならぬ。人生を生きてゆくのも、そのようなものかもしれない。

(9) 人生は楽しくあるべきものだ。たとえ日々の仕事が単調でつまらなくても、余暇をみつけて、いろいろの芸術を鑑賞したり、スポーツを楽しんだりして、人生を楽しく愉快なものにしていくべきである。

表27 高 2 高 3

(9)						
(6)	2	4	②9	3	2	③2
	1	3	20	0	2	22
	2	2	25	2	0	<u>23</u>
	男			女		

(9)						
(6)	3	5	37	2	1	②4
	0	2	31	1	3	11
	3	1	31	1	1	<u>17</u>

(9)の快樂論的考え方を肯定する者が全体を通じて多いが、(6)の禁欲的な考え方に対しては肯定、否定、分らないにそれぞれ分裂し、しかも

否定がともに多いことは、前述の諸傾向と並んでもっとも注目すべき傾向であると考えられる。(4)と(7)の対応の仕方ともみくらべてみると現代の高校生のひとつのいちじるしい特徴を示すものではないかと思われる。

## V. 結 論

以上の結果から導きだされる高校生の社会意識の一般的形態——

以上分析してきた本校生徒の社会意識の形態が、そのまま現代のすべての高校生の社会意識の一般的形態であるということは勿論できない。しかし、そこにみられる基本的な傾向はやはり共通するのではないかと思われる。そこにかがえるのは、第一に彼らが(いうまでもないことであるが)社会と時代の子であるということである。彼らは相当社会的なもの(時事問題についてもっている。しかしそれを形成するのはマス・コミの影響が強いのである)。事実を正確に知らなくても、あることがらについてはすでにある一般的な態度を形成してしまっている。大体において彼らはいわゆる「良識ある」判断を時事問題に関しても、人生観についても持っているように見える。また判断を下す際、相当慎重な態度をとろうとするものも少ない。労働運動に対してもそれを理解しつつ健全な発展を望み、快樂論をとりつつ、無制限な、制約を無視するような態度はさけようとする。受験勉強についても、それを認めつつ、しかしそこでみられる「馬車馬」式の生き方がいいのではないと考えるものが多い。

しかし、そこを一步進めて、その奥をさぐっ

てみると、そこに見出されるものは、安定した落ちつきではなく、矛盾し葛藤する考え方の対立である。彼らは、理想を、単なる絵にかいた餅的なものとしては否定する。その点、かつての高校生にみられたような現実を無視(あるいは蔑視すら)した理想主義的生き方とはちがう。しかし、ながら、彼らが現実のすべてを無批判に、無条件に肯定し、それに妥協しようとしているのではない。理想を捨てきることもしないのである。ここに矛盾がおこる。青年の各個人個人がそれぞれ相違した意見をもつ、ということ、これはみんながほぼ同じような考え方をしていた時代にはみられぬ問題をひきおこすが、しかしさらに同一個人の中にも、矛盾葛藤があるのである。これはⅣの3の後半においてわれわれがみてきたところである。

これは一面においては不幸な苦しみを現代高校生に与えているとあってよい。そのことは声を大にして「受験勉強」の弊の一つとして叫ぶべきであろう。しかし、われわれはその葛藤矛盾を克服し統一しようとする彼らの努力の中から新しいものが生れてゆくであろうことを期待し、そのためにこそ社会科教育が役に立たなくてはならないと思うのである。すなわち、現実を無視せずしかも理想も捨てない——どこまでも現実を離れず、現実に立脚しながら、それをより理想的なものに近づけてゆくような方向に一。それこそ、社会科教育の本来のたてまえであったはずのものである。今後われわれは、その具体的方法についての研究をすすめてゆきたいと思っている。